

ユニットケア型特別養護老人ホームにおける生活と介護に関する研究 －利用者とスタッフのかかわりからみた考察－

キーワード：ユニットケア、特別養護老人ホーム、生活、介護、かかわり

石井研究室 中田 萌実
八角 理絵
中堀 竜也

1. 研究目的

ユニットケアは「暮らしの場」としての環境づくりと、その中で「暮らしの実現」、「個別ケア」が大きな目標である。暮らしの場は建築空間的な視点からの整備で可能だが、個別ケアはケアのあり方そのものが問われることになる。しかし、スタッフの数や入居者の重度化などの実態から、必ずしも理念通りのどおりのケアはできないという声も現場からあがっている。特に今回の対象施設は開設後間もなく、また特養運営の経験もない法人であることもあり、その実践は容易なものではない。このような状況の中で、本研究では、ユニットケアの暮らしとケアの実態を、空間の利用様態と合わせて分析し、特にスタッフと入居者とのかかわりに着目することで、ユニットケアの実態と課題を明らかにする。

2. 調査の日時・方法

調査対象施設は、宮城県利府町の特別養護老人ホーム（K 特養）にて調査を行った。6つあるユニットのうち3つのユニットを対象とし、スタッフと入居者の空間利用と行為・行動について詳細に観察・記録を実施した。スタッフの調査は5時から20時までの15時間、1分ごとに滞在場所と行為・行動の記録を対象ユニットの全ス

タッフに対し行った（調査日は05年8月8日）。入居者の調査は7時から20時までの13時間、10分毎に滞り場所、行為・行動の記録をとった。調査は2回行い、1回目は05年7月29日、2回目は05年11月10日に行なわれた。

3. 対象施設の概要

調査対象施設は05年04月に開設した特別養護老人ホームである（図-1）。6つの居住ユニットから構成され、各ユニット定員は8～9名である。その他に、デイサービス（定員30名）、ショートステイ2ユニット（10名×2ユニット）で構成されている。ユニットとユニットは廊下で繋がっている。一部北側が2階建てで、喫茶コーナーなどパブリックスペースになっており、地域住民に開放された空間となっている。

4. 入居者の生活様態からみた考察

4-1 入居者の属性

ユニット1とユニット3の平均介護度は3.2となっており、ユニット2は2.8と少し低くなっている。各入居者の自立度・認知症度の状況を表-1に示す。

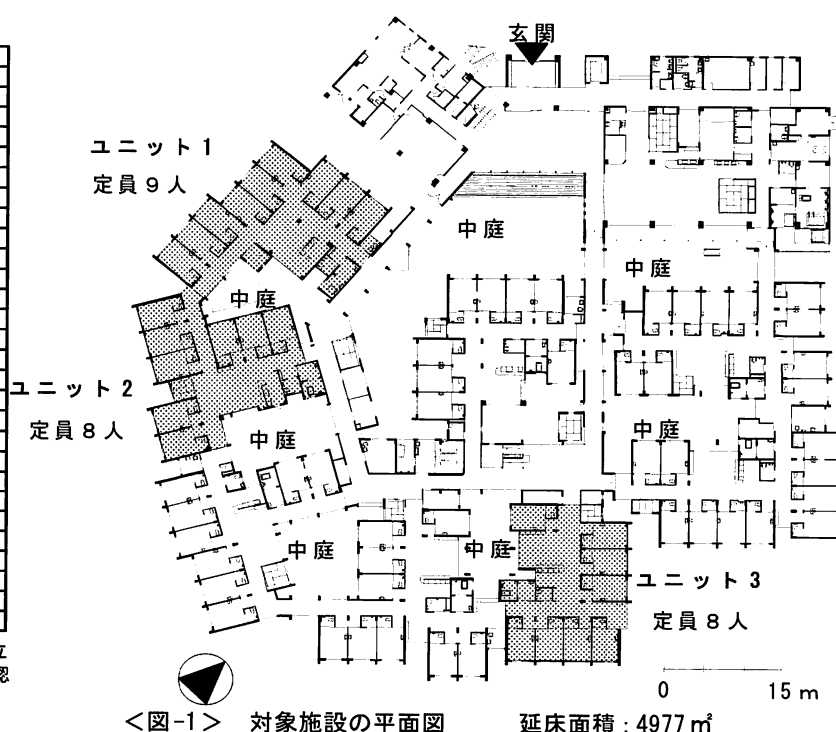
4-2 ユニット別にみた入居者の空間利用

入居者の空間別の利用割合を表-2に示す。各ユニットの入居者は1日の大半をユニットの居室と食堂で

＜表-1＞ 入居者の属性

	入居者	年 齢	介 護 度	自 立 度	認 知 症 度
ユニット 1	1A	81	1	A2	I
	1B	79	2	A1	Ⅱ b
	1C	82	4	B2	Ⅲ a
	1D	72	2	—	—
	1E	89	5	B2	Ⅳ
	1F	80	4	B2	Ⅱ b
	1G	93	4	C1	Ⅲ a
	1H	94	2	B1	正 常
	1I	76	5	C2	Ⅳ
	平 均	82.8	3.2	—	—
ユニット 2	2A	76	4	A1	正 常
	2B	83	4	B2	Ⅳ
	2C	87	2	A1	Ⅱ a
	2D	93	3	B2	Ⅱ b
	2E	95	1	A2	Ⅱ b
	2F	94	5	C1	Ⅱ a
	2G	76	1	J2	I
	2H	83	3	正 常	正 常
	平 均	85.8	2.8	—	—
	ユニット 3	3A	77	4	A2
3B		86	4	B2	Ⅳ
3C		83	2	A2	Ⅲ a
3D		84	4	A2	正 常
3E		70	4	B1	Ⅲ b
3F		92	2	A2	Ⅲ a
3G		89	3	A1	Ⅲ a
3H		81	3	—	—
平 均		82.7	3.2	—	—

* 要介護度は1～5の5段階で5が最も重介護である。自立度はJ、A1～C2の8段階でC2が最も自立度が低い。認知症度はI～Ⅳの8段階でⅣが最も重い。



＜図-1＞ 対象施設の平面図

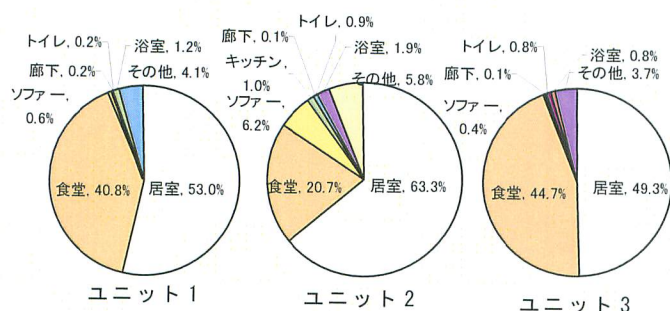
延床面積：4977㎡

過ごしている。その他(ユニット外)の割合は各ユニットとも低く、入居者は90%以上の時間をユニット内で過ごしていることが分かる。

各ユニットには談話スペースとして和室が設けられているが、2回の調査とも利用を確認することは出来なかった。ユニット1とユニット3は平均介護度が同様なこともあり、空間利用の割合が相似している。ユニット2は居室滞在の割合も63.3%と高い。ユニット2は自ら移動し、滞在空間を選択することができる介護度が低い入居者もいることから、ソファやキッチンでの滞在もわずかだが確認することができた。

4-3 ユニット別にみた入居者の行為・行動

調査で確認できた入居者の行為を整理し表したのが<表-2>である。各ユニットとも1回目、2回目を比較すると、3つのユニットでコミュニケーション(基本行為2)が増加している。また、何もせずにボーっとして過ごす行為割合が半減している。また<図-3>はユニット別に行為の割合を示したもののだが、移動行為はユニット1以外で減少している。ユニット1は2回目調査時にユニットの行事で4人の入居者が外出したため、移動行



<図-2>各ユニットの空間別にみた滞在割合

<表-2>入居者の生活行為・行動リストと頻度

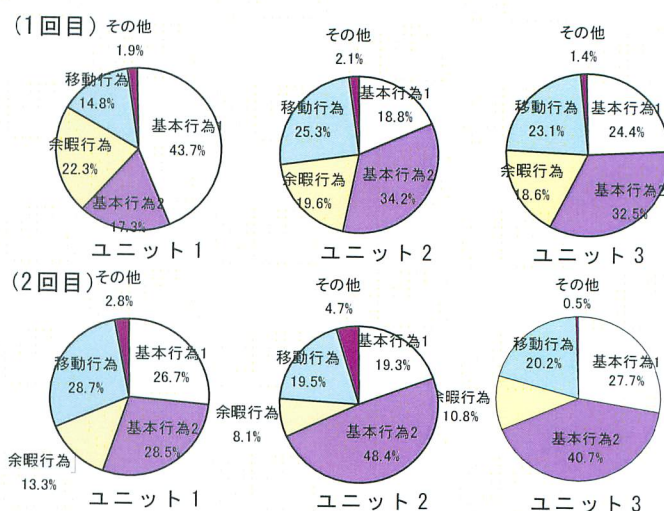
		1回目	2回目
基本行為1	食事を取る	218	237
	入浴	36	15
	トイレに行く	10	9
	寝る	70	73
基本行為2	スタッフと会話	267	389
	入居者間の会話	61	156
	奇声・大声をだす・机を叩く	13	23
	TVを見る	99	77
余暇行為	新聞を読む	13	7
	本を読む	0	2
	音楽を聴く	9	0
	ボーっとする	103	53
	指やタオルをしゃぶる	4	0
	チラシを折る	0	6
	レクリエーションに参加する	12	0
移動行為	歩いて移動する	126	96
	車椅子で移動する	84	117
	ユニット外へ行く	37	99
	売店へ出かける	1	0
	他のユニットに遊びに行く	8	0
その他	他の入居者の世話をする	4	11
	スタッフの手伝いをする	5	5
	食事の準備をする	3	6
	食事の片付けをする	8	13
	お茶を入れる	2	6
		1回目	2回目

為が増加している。空間の滞在様態は入居者の介護度や自立度の状況によって変わる要素が強いが、生活行為・行動はむしろ入居者の性格や各ユニットの雰囲気により決まってくる要素が大きいと思われる。

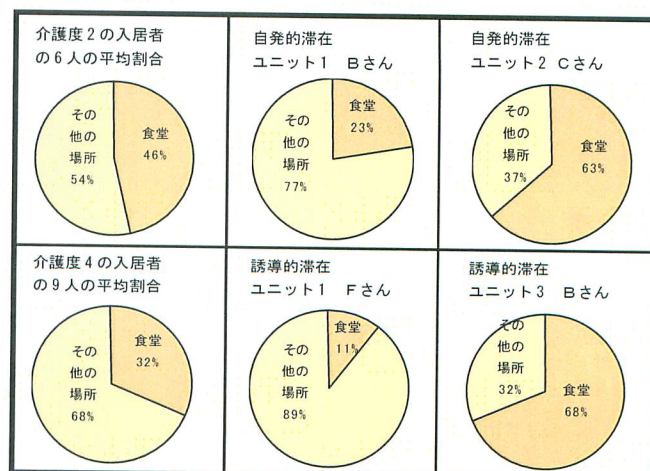
5. 利用者の属性からみた滞在様態

ここではまず入居者の滞在様態を介護度別にみる。例えば介護度2の入居者の空間利用は、食堂が46%、その他の場所が54%となっている。ユニット1 Bさんは、食事の時だけ食堂に出てきて、食べ終わると居室に戻る居室中心の生活である。ユニット2 Cさんは近距離なら自分で歩行できるが、足の状態が悪いため食堂テーブルからあまり動かない食堂中心の生活である<図-4上>。

介護度4の入居者は、食堂が32%、その他の場所が68%となっている。ユニット1 Fさんは、食事の時にスタッフの移動介助で食堂に出てくる。食べ終わるとスタッフによる移動介助で居室に戻る居室中心の生活である。ユニット3 Bさんはスタッフの移動介助で食堂に出てきてから1日のほとんどを食堂で過ごす。3 Bさんはスタッフの移動介助がないと動けず、空間利用はスタッフの誘導次第となっている<図-4下>。



<図-3>ユニット別にみた入居者の生活行為・行動割合



<図-4>空間利用の特徴

以上ように、介護度が低い人は、自発的移動や滞在によって居室中心、食堂中心の生活パターンに分けられる。一方介護度が高い人の場合にも二通りの型があるが、いずれもスタッフの誘導によるものである。

男女別での食堂滞在時間の割合は、男性20.8%、女性36.7%と女性の割合が高い。このように介護度、性別、個々の状況によって滞在場所の傾向が異なってくる。

6. スタッフの空間利用と介護行為からみた考察

6-1 スタッフの空間利用

ここでいう朝勤とは、前日からの夜勤スタッフである。遅日勤のスタッフが20:30で勤務を終えてから翌朝7:00に早日勤のスタッフが出勤してくるまで自分のユニットの他に、隣り合うユニットを一つ掛け持って担当することになっている。以下、勤務帯別に空間利用の様態をみる。

①朝勤: 朝勤スタッフの空間利用はそれぞれ担当ユニットが中心であり、その中でも居室が占める割合が高い。また、掛け持ちのもう一つのユニットにおいても、70%以上を居室が占めている。これは起床前後での入居者の

おむつ交換や、トイレでの排泄介助が理由として挙げられるためである(図-5左)。

②日勤: 日勤スタッフの空間利用をみると、25.4%で居室の利用割合が最も高く、次いでキッチンの24.6%、食堂の23.6%であった(図-5中)。日勤スタッフは食事やおやつの準備、入居者の食事援助など食堂やキッチンを利用する機会が多くなることから、居室・食堂・キッチンの割合が高い。

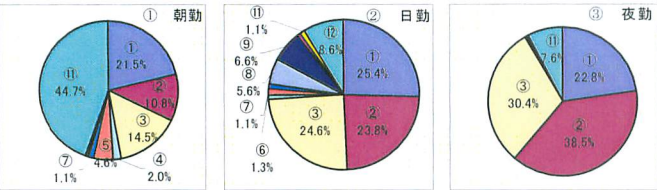
③夜勤: 夜勤スタッフは、食堂の利用割合が38.5%で最も高く、次いでキッチンが30.4%であった(図-5右)。これは、調査対象となった17:00～20:00までの3時間は食事作りや入居者への食事援助(介助)が主だったためである。

このように時間帯別に空間利用の様子をみると、それぞれの空間利用の様態には若干の違いが見られる。朝勤は居室の利用割合が高く、日勤は居室・食堂・キッチンの3つの空間を主に利用している。夜勤はキッチンと食堂の利用が多い。

6-2 スタッフの介護行為

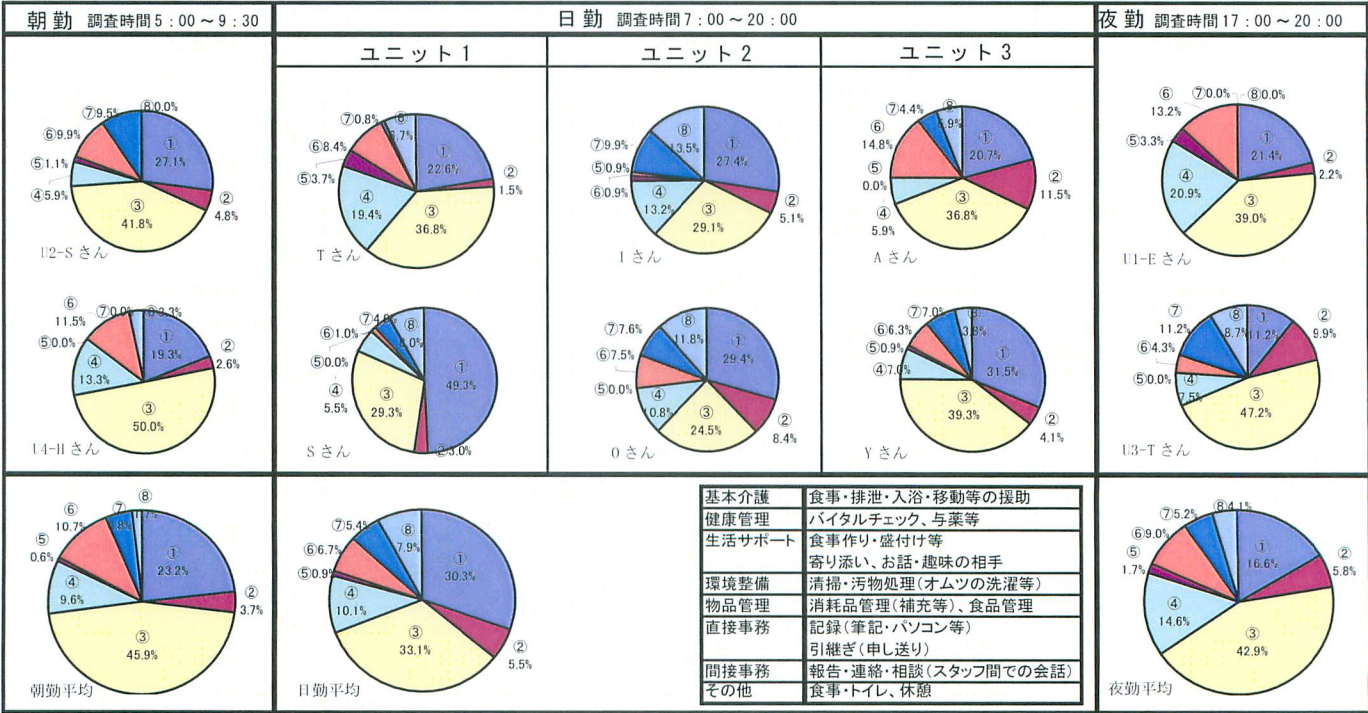
次に、勤務時間帯別にスタッフの介護行為をみる。<図-6>からは、いずれの時間帯においても食事づくりや盛付け・配膳など生活サポートの占める割合が最も高く、次いで基本介護の割合が高いことがわかる。この割合はどの時間帯で比較しても大きな違いはみられない。生活サポートのおよそ半分の割合は食事にかかわる業務であり、入居者とのかわわりは少なかった。

続いて、各ユニットの日勤スタッフ別にみた介護行為



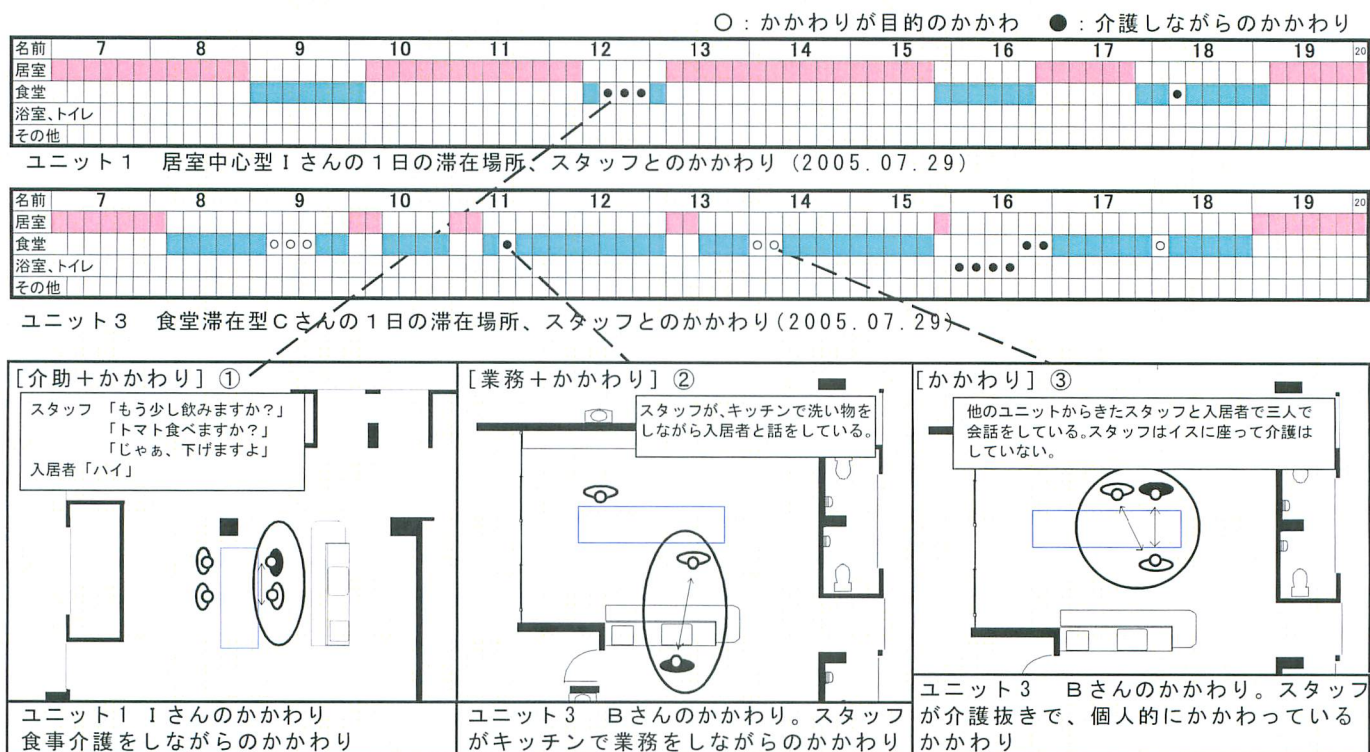
凡例: ①居室 ②食堂 ③キッチン ④和室 ⑤玄関 ⑥廊下 ⑦共用トイレ ⑧脱衣 ⑨個浴 ⑩洗面

<図-5> 勤務時間帯別にみた空間利用の割合(平均)

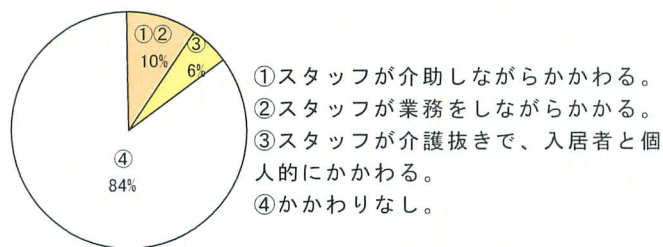


凡例: ①基本介護 ②健康管理 ③生活サポート ④環境整備 ⑤物品管理 ⑥直接事務 ⑦間接事務 ⑧その他

<図-6> 勤務時間帯別にみた介護行為の割合



<図-7>入居者とスタッフのかかわりの詳細場面



<図-8>入居者とスタッフとのかかわりの型と割合

を比較する。例えば入浴介助などは、従来の施設のように複数スタッフ対複数入居者という集団入浴というスタイルではなく、スタッフ対入居者が1対1でかかわるのがユニットケアである。スタッフごとに業務の差が出てくることになるが、ユニット1ではその特徴が顕著にでている。

7. 共用空間における入居者とスタッフのかかわり

入居者とスタッフとのかかわりの型とその割合を<図-8>に示す。割合でみると①と②(介助、業務の中でのかかわり)が10%、③(かかわることを目的としたかかわり)が6%、④(かかわりなし)が94%であった。ユニット別にみても、調査日別でみても同様の傾向であった。いずれにしても、じっくりと入居者と向き合っているのかかわり③が少ないことがわかる。

入居者とスタッフとのかかわりの詳細場面を<図-7>に示す。入居者個々の生活の中でみていくと、スタッフとのかかわりは食堂・キッチンを中心に起こっている。対面型のキッチンであることで可能となっているかかわりも少なくない。

8. 結論

開設して間もないK特養での入居者の生活と介護の実態が明らかになった。入居者とスタッフの空間利用の実態からは、食堂・キッチンが日常生活上、双方にとっての拠点となっていることが示された。介護度の高い入居者はスタッフが常に目が届く食堂に誘導され、業務の傍らで、また空間移動の際などに声掛けをしているというのが主な関わりである。このことから、ユニット内、特に食堂・キッチン周りの空間の作り方は重要になってくる。

ケアの面からみると、ユニットケアが目指すスタッフと入居者間の密度の高いかかわりは現実的には少なく、現状のスタッフ数や業務内容では難しい状況も明らかになった。入居者との「かかわり」が第一の目的ではなく、二次的な目的(ついで)にならざるをえない現実がある。スタッフを増やせば様々な可能性が生まれるが、それができないのであれば業務のあり方から見直し、さらにその中でのかかわりのあり方を考えていくことが必要となる。

また生活に視点を移すと、入居者には重度要介護者が多いため、入居者自ら行動すること(生活をつくること)は難しい。スタッフもかかわりの時間がとれずに、ユニット内だけの単調な生活になっているのが現実である。ユニット外にも様々な空間が用意されているが、ほとんど使われていないのが現状である。しかし、そのような入居者の状況だからこそ、より積極的にユニットの外にも生活を導き、豊かで刺激的生活を提供していくことが必要になるのではないだろうか。